

奈良々大家政

○大月啓子 梁瀬慶子

1-トルガム女大生活文化 花岡利昌

光は単に明るさを得るためだけのものではなく、住環境意匠の重要な要素であり、私達は自然光・人工光を問わず光線を住空間内に有効に用いた例を数多く知っている。

本研究では、感覚的にとらえられ、経験的に利用されている光線の基本的イメージを抽出・尺度化することを目的とし、その第一段階として光線の方向・量・強さの3要因を取りあげ、場の観念の悪い抽象的空間に光を投げかけて3要因が感情にどのような影響を与えるかを検討した。

方法：内装色黒(つや消し)の立方体空間(一辺80cm)に正面開口部からプロジェクターを用いて光を入射させ、アンゲル現象により光線を明瞭にした状態で手前の開口部から観察させ、光線から受ける感情を7段階評価のSD法により調査した。光線の方向・量・強さの各要因別に検討するとともに、主成分分析によりイメージの因子構造を明らかにし、更に、因子得点や数量化分析の結果から各要因が感情に与える影響を多次元的に考察した。

光線の方向は水平方向5段階・垂直方向7段階、光量は2段階、強さは3段階である。

結果：主成分分析の結果から、力強さ(Potency)・活動性(Activity)・快適さ(Evaluation)の3因子が抽出された。感情効果への影響は、光線の方向よりも量及び強さの方がより大きい傾向がみられ、方向については、水平方向角度との間に線型的関係が多いか、垂直方向角度との関係は変則的である。また、光線の強さは力強さ・活動性の因子への影響が強く、方向は快適さの因子への影響が強いかもみられた。今後、更に他の要因についての検討を直ねるとともに、得られた基本的イメージと実例との検討も進めていきたい。